

## 疑問から例示形式へ

大阪大学大学院特任研究員

岩田 美穂

### 1 はじめに

現代日本語には、次のような例示並列形式が複数存在する。

- (1) a. 今日はカレーなので、ジャガイモやら人参やらを買ってきた。  
b. 今日はカレーなので、ジャガイモとか人参とかを買ってきた。  
c. 花子はグッチだのプラダだのブランド物ばかりを欲しがる。  
d. 手紙なりメールなりで連絡してください。  
e. 日曜日は買い物にいたり映画をみたりした。

このうち、「やら」と「とか」は疑問の助詞である「ヤラ (ン)」と「(ト+) カ」に由来する。

- (2) a. さては命のいきんずるやらんと、(平家下 328)  
b. 海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしけむ松浦佐用姫 (万葉 3.252)

例示形式の中に疑問の助詞由来の形式が二つ存在することは、疑問と例示の関係を示唆している。

日本語史において、疑問の助詞は直接疑問の他にもさまざまな用法を派生させている。

- (3) a. 何を思ってそんなことを言ったのやら。  
b. 何があるやらわからない。  
c. 何やら変な音がする。  
d. 山田やら田中やらが来た。
- (4) a. 山田が来ましたか。  
b. 山田が来るかわからない。  
c. 山田は何か持っていた。  
d. 山田か田中が来る。

本発表では、疑問をめぐる歴史的変化の一つとして例示用法のヤラとトカについて取り上げる。

#### 1.1 先行研究

例示用法のヤラやトカは、疑問の助詞が派生させた用法の中では、これまであまり注目されてこなかったため、詳細な記述を行った研究はほとんどない。

歴史的な研究の中で、例示用法のヤラ、トカを特に取り上げて述べたものとしては、此島 (1966) があるが、いずれも「江戸時代に入ってから新しいもの」、「引用の「と」の下に「か」の添うこともあるが、この「とか」が一語化して、下の「言う」のような

動詞なしに並立に用いられるようになった」(p.222)のように簡単に述べられているにとどまる。

近年、衣畑(2007,2011)及びKinuhata et al(2009)において、注釈節から名詞句への構文変化が取り上げられ、その一つにヤラの変化が位置づけられることが述べられている。しかし、例示用法のヤラ自体がいつ頃どのようにして発生したか、という点については言及されていない。

このような現状をふまえ、岩田・衣畑(2011)においてヤラを、岩田(2014)においてトカを取り上げ、いつ頃どのような用法から例示が発生したのか、という点を明らかにした。

## 1.2 調査資料

調査に用いた資料とおおよそのコーパス規模は以下の通り。用例については、用法に関わらず、全てのヤラ・トカを採取した。

8世紀：万葉集(15万字) 11世紀：源氏物語(92万字)、14世紀：平家物語(覚一本)(39万字)、15世紀：史記抄(74万字)、16世紀：蒙求抄(50万字)、17世紀：虎明本狂言集(45万字)、18世紀：近松浄瑠璃(51万字)、上方断本(75万字)、19世紀：上方洒落本(28万字)、江戸語(『浮世風呂』『春色梅児誉美』『春色辰巳園』等)(15万字)

## 2 ヤラの例示用法(岩田・衣畑(2011)より)

ヤラの例示用法を他の用法と区別するために、次の2つの条件を用いた。

- i) 並列で用いられること
  - ii) 連言解釈になること
- (5) a. 田中やら山田やらが来た。  
b. 田中が来たやら山田が来たやら。  
c. 誰やらが来た。  
d. (私は)誰が来るやらわからない。

この2点の特徴に該当するヤラの例示用法は18世紀前半頃から見られるようになる。例示は、ヤラが持つ用法の中では最も遅くに成立したことになる(高宮2004、此島1966参照)。

- (6) a. 台所の板敷、けつまづくやら滑るやら。はふ\／這ひ出で、(近松2.100)  
b. 典にはなほも飲みしこり、踊るやら歌ふやら。騒ぐどさくさ。(近松2.343)

### 2.1 構文的条件

直接疑問、間接疑問、不定の3つの用法は、ヤラが構文内のどの位置で用いられる

か、という構文的な条件で区別できる。直接疑問は、(7)のように文末または後続文の注釈節として用いられる。間接疑問は、(8a)のようにヤラが節を取り、動詞の項として主節に埋め込まれる。また、不定は(8b)のようにヤラが語を取り、主節動詞の項となる。

- (7) a. 丹波の国のお百姓の名をば何といふやらん (虎明上 57)  
 b. 昔ノ人モサフ思フタヤラウ古本ニ上ノ周市ヲハ周市ト点シタソ (史記 6.26)
- (8) a. 鶏卵ヲモ土卵ト云ヤラウ不知ゾ (史記 17.40)  
 b. ナニヤラウデ此注ヲ見タソ (史記 14.21)

例示用法のヤラがどのような位置で用いられているか、という観点から用例を分類すると、表1のような結果となる。(9)に文末・注釈の例を、(10)に名詞句位置での例を挙げる。

- (9) a. 吝い者を手本に、杓子を定規に使はるゝ。正月飾りが釣瓶繩になるやら。七月の芋殻が壁下地になるやら。念仏講に当たれば、炒豆ついでに灸して (近松 1.297)  
 b. 訳もなく、後ろ向くやら、前向くやら、縦に乗るやら横堀を。急げ $\setminus$ と走らせし。(近松 1.74)
- (10) a. 念仏やら題目やら、中臣ばらい経陀羅尼、八宗九宗のしつぽく煮 (漸本 8.195)  
 b. 狂言役者へ、奉公やら養子やらに参って、女形をいたしたを (近松 1.72)  
 c. 書出しやら掛け乞ひやら、今宵までも尋ねて来る。(近松 2.360)

表 1 例示のヤラ句の構文的な位置 岩田・衣畑 (2011: 70)

	前晰	近松	後晰		洒落	江戸
			~1750	~1800		
文末	0	13	3	3	3	2
注釈	0	6	3	6	1	4
コピュラ後接	0	0	0	0	1	0
スル後接	1	0	0	0	1	0
名詞句への注釈	0	2	2	2	1	2
裸名詞	0	3	0	4	0	2
助詞後接	0	1	1	3	1	0
格助詞前接	0	1	0	0	0	0

表1をみると、文末・注釈の占める割合は、18世紀前半では70%以上であり、18世紀

後半以降は50%程度となり、例示が成立した初期段階である18世紀前半に特に多く見られることがわかる。この結果は、例示が直接疑問から派生したことを示唆する。

## 2.2 各用法と例示の対応関係

構文的な条件以外の面からも例示と他の用法との関係を検証するために、形式的な特徴を比較していく。

表2 各用法の形式的特徴の対応

	不定詞	並列	動詞の制限
例示	あり／なし	並列	なし
直接疑問	あり／なし	並列／単独	/
間接疑問	あり／なし	並列／単独	あり
不定	あり	単独	なし

例示のヤラを項として取る動詞を調べると、節を取れる動詞ではないことがわかる。したがって、間接疑問から例示が派生したとは考えにくく、直接疑問から派生したと考えるのが最も妥当である。

- (11) 名詞述語、参る、ある、来る、する、打つ、すぎる、立つ、ひしぐ、いる、付ける、寄付く、売る、手配する

## 3 トカの例示用法

トカ（ト+カ含む）には、例示以外の用法として歴史的に次の4つの用法が確認される。(12)のような例を直接疑問（係り結び）、(13)を伝聞、(14)を選言、(15)を強意とそれぞれ呼ぶことにする。

- (12) a. 何すとか使いの来つる君をこそかにもかくにも待ちかてにすれ（万葉4.629）  
b. 上つ瀬にかはづ妻呼ぶ夕されば衣手寒み妻まかむとか（万葉10.2165）
- (13) a. 我ながら、更に、え思ひ出でぬに、紀の守とか、ありし人の、世の物語すめりし中になむ、「…」とほのかに、思ひ出でらるゝ事ある心地せし。（源氏5.430）  
b. 五音相通とか、何とかがかなつてゐるから、むりじやアねへと、此中も博識な人がおはなしだつけ。（浮世風呂134）
- (14) a. 霊トカ属トカセヨトアルホドニ（蒙求10.9ウ）  
b. 我死ナバ…霊ト諡スルカ。又属ト諡ヲスルカセヨ。（蒙求10.9ウ）

- c. 此せりやきは、火にあぶるものにてはなきに、芹煮とか煮芹とかいうべきものなるに (嘶本 5.7)
- (15) a. なにとかして、子どもをつかひにやり候らはんとふんべつして (嘶本 1.163)
- b. 何とか返事をしてもいゝじやねへか。(梅児誉美 79)

このうち、直接疑問が最も古く、8世紀から見られる。伝聞は11世紀頃から、選言は15世紀頃、強意は18世紀頃からそれぞれ用例が確認できる。

### 3.1 成立時期

例示用法の成立時期をみるために、次のような観点から用例を絞り込んだ。

- i) 並列で用いられること
- ii) 不定詞を含まないこと
  - (16) a. 今日はカレーなので、ジャガイモとか人参とかを買ってきて。
  - b.?? 今日はカレーなので、ジャガイモとか何とかを買ってきて。
- iii) 話者が並列された事態の両方を直接知っていること (連言解釈になる)
  - (17) a. 山田とか田中とかが来た。
  - b. 潮来を謳へとか、廻り潮来にしろとかネ。声色がいゝの歌祭文が好きだのといふお客は取ようござへます。(浮世風呂 266)
- iv) 動詞の項となる名詞句の位置で用いられる例があること
  - (18) a. 霊トカ厲トカセヨトアルホドニ (蒙求 10.9 ウ)
  - b. 我死ナバ…霊ト諡スルカ。又厲ト諡ヲスルカセヨ。(蒙求 10.9 ウ)
  - (19) a. ジャガイモとか人参とかを買ってきて。
  - b. ジャガイモか人参(か)を買ってきて。

以上の条件を満たす用例を選定した結果、例示は遅くとも19世紀頃には成立していたものと考えられる。以下19世紀の例示と考えられる例をあげておく。

- (20) a. 潮来を謳へとか、廻り潮来にしろとかネ。声色がいゝの歌祭文が好きだのといふお客は取ようござへます。(浮世風呂 266)
- b. 今日帰ると造作とか戸棚とかを買って仕舞ますヨ (梅児誉美 100)

### 3.2 各用法と例示の関係

以下に各用法の特徴をまとめる。

- (21) a. 直接疑問 (係り結び)
  - (i) 単独で用いられる
  - (ii) 14世紀頃には衰退
- b. 伝聞
  - (i) 単独・並列で用いられる

(ii)9~10 世紀成立 (13 世紀以降上方では減少)

(iii)当該事態について話者が直接知らない

c. 選言

(i)並列で用いられる

(ii)15 世紀成立

(iii) 当該事態について話者が直接知らない場合と知っている場合の両方がある

d. 強意

(i) 単独で用いられる

(ii) 18 世紀成立

(iii)必ず不定詞「何」を取る

(iv)意志、命令、義務、勧誘などのモダリティ形式を伴う

並列で用いられるという例示の特徴を考えれば、伝聞か選言のいずれかからの派生を考えるのが妥当である。本発表では、例示は伝聞からではなく、選言から派生したと考える。理由は以下の3点である。

① 上方において13世紀以降伝聞のトカが激減する。

② 伝聞は単独が基本であり、並列の場合も「～トカ何トカ」が圧倒的に多い。

表3 伝聞用法の用例数 ※( )内は「何」を含む数

	万葉	源氏	平家	史記	蒙求	虎明	前噺	近松	後噺	上洒	江戸
単独	0	40	0	1	0	0	1	0	2	3	52
並列	0	1(1)	0	2(2)	0	0	0	0	0	1(1)	14(12)

③ 伝聞用法は意味的に話者が直接知らない情報である。

(22) a. 夕食はコンビニか食堂に行く。

b. 今週は忙しかったので、夕食はコンビニか食堂に行った。

#### 4 疑問と例示の関係

例示とは、集合の形成に関わる機能の一つである(江口1998参照)。例えば、「太郎やら次郎やらが訪れた」と言えば、{太郎、次郎、…} = {訪れた人物}のように、並列された要素(太郎、次郎)以外の他の要素を含意しながら、それらが含まれる集合(訪れた人物)を示す、というのが例示の機能である。

Kinuhata et al (2009)では、集合論の観点からナリの意味変化について次のような過程を提示している。

(23) a. 身は貧也かたわ也、おとゝ弟子に土佐を名のらせ。あに弟子はうか\

といつ迄浮世又平で。…いきでいてもかひなし。(近松 3.136)

- b. 先ツ達ツて御子息力弥殿に。娘小浪を云号致したからはお前なり私なり。  
あいやけ同士御遠慮に及ぬ事。(仮名手本忠臣蔵 354)
- c. 勿論是から福住屋へも、懸合ひ付けて、首代金なり下手人なり、處置を  
付けにやなりやせん。(恋の花染 102)

(24) intersection of sets > total listing of the elements in the set > partial listing of  
elements in the set (Kinuhata et al 2009;94)

また、タリは次のような例から発生したと考えられる。

- (25) a. 船ハ浮又沈又漂へバ、立タル扇ヒラメイテ、(延慶平家 6.19 ウ)
- b. 究竟ノ兵者已上七騎、早足ノ進退ナルに乗テ、歩ツアガセツ、屋島ノ館  
へゾ馳行ケル。

ナリやタリの変化が示していることは、例示へと変化するためには、その前段階として何らかの形で集合を形成する機能を先に獲得しておかなければならない、ということである。

疑問文は命題の集合を作ると考えられている。

- (26) a. 大納言をば、いつくにをかれたるやらんとて、ここかしこの障子ひきあ  
け (平家上 83)
- b. {大納言をここにをかれたる、大納言をかしこにをかれたる}
- (27) 我ばかり合点の、数も読むやら、読まぬやら、懐に押し入れ (近松 2.250)
- (28) a. 台所の板敷、けつまづくやら滑るやら。はふ\ / 這ひ出で、(近松 2.100)
- b. {板敷でけつまづく、板敷で滑る、…} = 這い出る様子

(岩田・衣畑 (2011) より)

また、選言も疑問と同様に選択肢の集合を作る、という機能であると考えられる。選言では、列挙される要素は基本的に集合の全てであるが、この挙げられる要素が何らかのきっかけによって集合の「一部である」という解釈を受けるようになれば、例示となる。

## 5 まとめと今後の課題

本発表では、日本語史において、疑問文の「命題の集合を作る」という機能から例示用法が派生したことを述べた。

- (29) a. 太郎は今日学校に行くやら言いよった。
- b. 今日、太郎さんや一が来る。(鳥取県八頭地区)

【使用テキスト】

新編日本古典文学全集『万葉集』(小学館)、日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)、日本

古典文学大系『平家物語』上・下（岩波書店），抄物資料集成『史記抄』『毛詩抄，蒙求抄』（勉誠社），  
『大蔵虎明本狂言集の研究』本文篇上中下（表現社），新日本古典文学全集『近松門左衛門集』1～3  
（小学館），新本大系1～19（東京堂出版），洒落本大成2～27（中央公論社），日本古典文学大系  
『浮世風呂』（岩波書店），日本古典文学大系『春色梅児誉美』（岩波書店）

※句読点など一部表記を改めたところがある。

【参考文献】

- 岩田美穂（2014）「例示並列形式としてのトカの史的変遷」『日本語複文構文の研究』（益岡隆志ほか編），  
pp. 323-346, ひつじ書房
- 岩田美穂・衣畑智秀（2011）「ヤラにおける例示用法の成立」『日本語文法』11-2, 日本語文法学会,  
pp. 60-76
- 江口正（1998）「日本語の間接疑問節の文法的位置づけについて—不定的同格要素として—」『九大言  
語学研究室報告』19:5-24. 九州大学言語学研究室
- 此島正年（1966）『国語助詞の研究—助詞史の素描』桜楓社
- 衣畑智秀（2007）「付加節から取り立てへの歴史変化の2つのパターン」『日本語の構造変化と文化化』  
（青木博史編）pp. 65-91, ひつじ書房
- 衣畑智秀・岩田美穂（2010）「名詞句位置のカの歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』6  
-4, 日本語学会, pp. 1-15
- 高宮幸乃（2004）「ヤラ（ウ）による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」『日本語学文学』15,  
三重大学日本語日本文学, pp. 17-31
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味』Ⅲ くろしお出版
- 野村剛史（1995）「カによる係り結び試論」『国語国文』64-9, 京都大学国語学国文学研究室, pp. 1-27
- 山内美穂（2012）「機能語「トカ」の形式と機能の変遷—上古から現代までの文献を使用した通時的調  
査—」『日本語文法学会第13回大会発表予稿集』pp. 107-114. 日本語文法学会
- Karttunen, Lauri (1977) 'Syntax and Semantics of Questions' *Linguistics and Philosophy*, Vol. 1. pp. 3-44.
- Kinuhata, Tomohide, Miho Iwata, Tadashi Eguchi, and Satoshi Kinsui (2009) 'Genesis of 'Exemplification' in  
Japanese' *Japanese/Korean Linguistics*, Vol.16. ed. by Y.Takubo et al. pp87-101, Stanford:CSLI.